

## 震災復興ブレイクスルーをとおして

Looking Back over “Breakthroughs of the Disaster Recovery from 3.11”

大月敏雄 Toshio Otsuki

東京大学教授、会誌編集委員

2014年1月号から本誌で連載が始まった「震災復興ブレイクスルー」は、ほぼ2年続き、2015年10月号の第22回で終了した。東日本大震災は、記録のうえではまれに見る広域大規模の津波被害であり、被災の全貌が把握されるまでに長時間かかり、なおかつ被災が複数の県、多数の市町村にまたがっていたために、避難所の設置や仮設住宅・仮設店舗の提供、そして防災集団移転促進事業や災害公営住宅事業等のやり方のバリエーションが実に多岐にわたることとなった。災害救助法では、これらの災害対応の基本的な主体を都道府県と規定しているために、各県の住宅政策を担当する建築住宅課は通常業務の量を遥かに超える仕事を暗中模索状態でこなさなければならなかった。各県ではさらに、被災した市町村の実情や要望に合わせて、それぞれ独自の対応を図らねばならず、結果として、誰も復興の全貌を把握しえないような複雑多様な復興プロセスが進行することとなった。さらに、東京電力福島第一原発の爆発事故は福島県を中心として、この状況をより複雑化している。

誰しものが全貌を把握できないなかでコトを進めようとする、それぞれのエリアで独自の創意工夫が生まれやすい。少数の解決法ですべての事態を解決する全体主義的なプロセスではなく、地域ごとに編み出された創意工夫に満ちた解決法で個別に課題に対処していくやり方の一つひとつから学べることは多いはずだ。しかも、今回の大震災では、ブレイクスルーと呼んでいいような、「今回初めて、こんなかたちの復興プロセスのシーン

をつくることができました」というような出来事が、結構たくさんあった。ならば、それらのブレイクスルーを集め、並べ、できるだけそれらの「突破」が可能であった理由を記して、他日に備えよう。これが、本誌で「震災復興ブレイクスルー」の連載を始めた動機であった。

結果、仮設住宅に関連した新たな動き、遠隔避難の動き、震災前と震災の「記憶」にまつわる動き、防災集団移転促進事業という新たなテーマ、ソーシャルビジネス的な小さな復興の動き、災害公営住宅の新たな動き、などのブレイクスルーを、むろんすべてではないものの、捕捉することができた。しかしながら、読者の反応は「ずっと仮設系の話ばかりで、復興の話はないの？」というものが多く、編集会議でもこのような意見が続出していた。確かにそうである。震災後5年も経とうとしている時に、なかなかブレイクスルーと呼べるような復興の絵姿が見えてこない。これは、単にわれわれの情報収集力のなさのみに起因せしむべき課題ではなく、実は、今われわれが「復興」と呼んでいるもの自体に課題が潜んでいるのかもしれない。

今回多様な復興プロセスが進行していると書いたが、実は大きく共通しているところがある。防災インフラ整備を行っている間は、基本的には民間のそれぞれの主体の復興が「待った」を掛けられるということである。今回の場合は、防波堤ができないと〇〇ができない、地盤面のかさ上げができないと〇〇ができない、区画整理事業の後でない〇〇ができない、といった具

合に、災害インフラのめどが立つまでに、いろんな復興につながる活動が開始されにくかった。このことは、東日本大震災後に起きた広島土砂災害、伊豆大島土砂災害にも共通している。それぞれ、広島では都市計画道路とその下に設置される放水路ができた後に、大島では河川拡幅が終了した後に、ようやくまわりの民地の土地利用計画が着手されようとしている。これは、阪神・淡路大震災で大規模な区画整理の終了をみんなが待っていた状況と同じだし、さかのぼれば、関東大震災後の区画整理事業でも同じプロセスがとられていた。そこでは、焼け跡に住民が自力再建でそれぞれの家や店を復興しつつあったところに区画整理事業が入り、せっかく自力でつくった家を取り壊したり曳家したりしていた。そして、この帝都復興区画整理の「大成功」が、その後の日本の災害復興の順番を大きく規定してきたに違いない。

こうした、まちをつくっていく順番に対する考え方をさかのぼれば、明治17年に芳川顕正が山形有朋内務卿に送った東京市区改正の建言のなかの、「道路橋梁及河川ハ本ナリ、水道家屋下水ハ末ナリ」に明確に現れている。すでに藤森照信が『明治の東京計画』で指摘しているごとく、これは単に、まちの建設の順番を述べたに過ぎないという説に、私も与する者であるが、インフラをつくっている間、ひたすら「待った」を掛けられている状況から、インフラをつくりながらも、日常生活の回復ができるようなまちづくりの順番(復興プロセス)を、賢く考えられないものかと、最近考えている。

	タイトル	著者	対象	
1	コミュニティケア型仮設住宅 Temporary Housing for Community Care	大月敏雄	仮設住宅	コミュニティ
2	「失われた街」模型復元プロジェクト Lost Homes Project	槻橋修	街	記憶・記録・蓄積
3	福島県新地町・防災集団移転促進事業 Collective Household Relocation in Shinchi Town, Fukushima Prefecture	江田隆三	町	制度・合意形成
4	仮設のトリセツ Customize Manual of Temporary Housing for Disaster Victims	岩佐明彦	仮設住宅	暮らし方
5	木造仮設住宅——東日本大震災における木造仮設住宅の現状 Wooden Temporary Housing —— The Current Situation of Wooden Temporary Housing at the Time of the Great East Japan Earthquake	宮原真美子	仮設住宅	生産・制度
6	復興のソーシャルディベロップメント「ISHINOMAKI 2.0」 Social Development in Restoration	西田司	街	コミュニティ
7	図絵による失われた景観の記録 Record of Lost Landscape By Pictorial Map	岸本章	街	記憶・記録・蓄積
8	続・復興のその先に向けたコミュニティ・デザイン ——あすと長町仮設住宅(仙台市)での取り組み More Community Design toward an After Recovery —— At Asuto-Nagamachi Temporary Housing in Sendai	新井信幸	公営住宅	コミュニティ
9	小規模・暮らしまるごと復興 ——陸前高田市広田町長洞集落 Recovery from Tsunami in Small Scale and Whole —— Nagahora Village, Hirota Town, Rikuzentakada City	濱田基三郎	集落	コミュニティ
10	災害公営住宅第1号 相馬井戸端長屋とその可能性 Possibility of the First Disaster Public Housing (Soma Well Side Tenement House) for Elderly in Soma	伊東充幸	公営住宅	コミュニティ
11	笑顔の再生「モバイル・すまいる」プロジェクト Regeneration of Smiles “Mobile Smile” Project	山下保博	仮設住宅	生産・制度
12	気仙沼内湾地区の「まち」と「海」の復興コミュニティ拠点 Community Spaces for Post-disaster Recovery, Connecting the Sea and the Central Area of Kesenuma	阿部俊彦	街	コミュニティ
13	仮設住宅の再利用の可能性 —— Possibility of the Reuse for Wooden Temporary Housing	浦部智義 芳賀沼整	仮設住宅	生産・制度
14	借り上げ(みなし)仮設住宅 The Housing Lease Program for Disaster Victims	米野史健	仮設住宅	生産・制度
15	オートキャンプ場を転用した仮設住宅団地 Temporary Housing Site Converted from Auto-camping Site	岩佐明彦	仮設住宅	生産・制度
16	内陸避難者が集う場 Places Where Victims Gather in the Undamaged City of Iwate Prefecture	富安亮輔	仮設住宅	コミュニティ
17	「みんなの舞台」の建設 ——震災後3、4年目における仮設住宅地支援の可能性 Construction of ‘A stage for all’ —— Attempts for Temporary Housings 3-4 years After the Disaster	井本佐保里	仮設住宅	コミュニティ
18	建築家に何が可能か What Do We Contribute as an Architect?	千葉学	公営住宅	コミュニティ
19	仮設商店街を利用した商業再生の可能性 Commercial Regeneration by Temporary Shopping Malls after Great East Japan Earthquake	泉谷春奈	仮設商店街	生産・制度
20	高齢者等のサポート拠点 Support-center for the Elderly	富安亮輔	仮設住宅	コミュニティ
21	「人」が「云う」ことで「伝」える 100年後に伝わるアーカイブを It Transmits because It Keeps Talking Technique of Transmitted Archive 100 Years Later	佐藤正実	街	記憶・記録・蓄積
22	みんなの家 HOME-FOR-ALL	小林徹平	仮設住宅	コミュニティ

表1 連載「震災復興ブレイクスルー」全22回タイトル一覧(本文は、会誌ホームページ <http://jabs.ajj.or.jp/> で閲覧可能)